

## 書 評

入江節次郎著

## 『帝国主義の解明』

山 本 尚 一

## 1

「帝国主義とは、一体何であろうか」と入江教授は、本書の冒頭で問うている。一般に帝国とか帝国主義という用語は、日常ひんぱんに用いられているが、この問題を科学的に分析した書物は、意外に少ない。むしろこれらの言葉のもつ政治的色彩のために、アカデミックな経済学者は、これらの用語の使用をできるだけ避けてきたと思われるふしがある。本書は、題目の示すように教授の卓抜な総体把握能力と批判精神を駆使して、この問題に正面から取組んだ労作である。

著者入江教授は、長年にわたる帝国主義研究者として広く認められている。単著のみをとっても『独占資本イギリスへの道』（ミネルヴァ書房）1962年、『帝国主義論序説』（ミネルヴァ書房）1967年、『帝国主義論への道』（ミネルヴァ書房）1973年があり、その他編著や論文が多数ある。ここに紹介する本書はこれまでの研究の到達点を示す道標であり、われわれ同学がその早い刊行を願っていた待望久しい書なのである。本書は、つぎのような3部構成をとっている。

- I 帝国主義とは何か
- II 帝国主義の学説
- III 帝国主義の研究

著者は帝国主義論の方法上の行き詰りを打開する道として「資本主義世界体制の歴史構造への接近」と「帝国主義に関する古典的諸学説の再検討」の2つの方向を示している。上掲のIおよびIIは、それぞれに対応したものであり、IIIはいずれかに解消させようものと思われる。教授の研究軌跡は、たえずこの2つの問題をめぐってゆれを示してきたが、とくに本書は、さきの帝国主義論にかんする理論的研究の2著と異なって歴史実体的研究

に傾斜していることに特色がある。本紹介では、さらに筆者の問題関心から教授の資本主義の世界体制の構造的内実の研究に焦点を合わせたためかなり偏っていることをあらかじめおことわりしておきたい。

## 2

著者は、帝国主義にかんする古典的学説を総括して「帝国主義とは、独占資本や金融資本の世界的支配と世界的連携の体制が成立し、その蓄積が資本の輸出を不可欠の脈管として地球のすみずみにいたる全世界市場的規模において行なわれていく資本主義の発展段階である」(18ページ)と規定している。又重点のおきかたの違いによって「重工業資本主義の体制」(21ページ)、「独占の経済体制」(35ページ)および「資本主義の世界体制の段階」(19ページ)とも規定している。著者の帝国主義論の特質は『資本論』との「直結」や「並列」を排して「段階」と「重層」を強調する点にある。

教授は、資本主義は産業資本の体制の成立をまってその自立性を獲得するものと見るのであるが、産業資本を原理的な意味と段階的な意味とに区別する。原理的な意味での産業資本は、過程的なものであるが、主導的な産業の交替によって資本主義を「綿工業資本主義の段階」(1820—50年)、「鉄工業資本主義の段階」(1850—70年)および「重工業資本主義と資本輸出の段階」(1870—1914年)に段階区分している。帝国主義とはいうまでもなく第3段階であり、「前段階と前々段階において編成された資本の再生産循環の基軸的構造をさらに重層的に包摂しながら、より高度に発達した生産力を表徴する重工業を主導産業として再編成されていった段階」(29ページ)である。そしてとくに前段階との変容のメルクマールとして「鉄から鋼への転換」をあげ、「転炉・平炉製鋼を主軸に鋼の大量生産体系が樹立されていること」(42ページ)を前提とし、この製鋼部門を中核として関連する重機械製造部門や造船部門が重工業という広い産業部門に包摂されて一団となって編成されること」(42ページ)を基軸的指標としている。この重工業を主導として世界的に産業構造や市場構造の再編成が進められ、前々段階に「成立」し、前段階に「確立」した自由競争資本主義は、この期に「崩壊期」を迎え、資本主義は、自由競争から独占の経済体制へと転換する。この独占の成立は、『資本論』における資本の集積・集中との規定から直ちに導き出されるべきではなく、具体化した段階的過程を概念化する生産の集積を基底的範疇として展開されなければならない。

こうした生産体系の変化に基礎づけられた独占資本の成立は、「金融過程を含めた全社会

機構的レベルにおいては、金融構造の変化をもとりこんだ金融資本が成立することをその内実とする」(45-6ページ)。この段階の資本主義は、重工業をその蓄積・循環の主軸とし、資本の輸出をその不可欠な脈管とするにいたる。資本輸出それ自体は、金融資本固有の範疇ではないが、その下に形成された過剰資本と結びつくにいたって質的転換をとげる。とくに鉱山やプランテーションに対する資本の輸出が、金融資本の時代に重要となるが、その蓄積運動のために現地において労働力が確保されねばならない。この暴力的な労働力調達方法として J. A. ホブスンに援用しながら次の3つをあげている。すなわち、(1)「武力を用いて強制的に原住民労働力を調達する方法」、(2)「暴力的に原住民を土地から追い払い、彼らを農業だけでは暮らしていけないような地理的な条件にある代替地へ強制移住させるという方法」、および(3)「<契約労働者>とならないかぎりその支払いができないようにする目的で、<小屋税>、<人頭税>といった税金を課するという方法」、がこれである(101-2ページ)。このように帝国主義段階において本源的蓄積の局面が再現されることは、著者の「強調点」となっていると思われる。

このように金融資本は、資本輸出をその蓄積の不可欠の脈管とし、後進地域の原住民に対する暴力的な支配をおこなうために、世界的な「支配と強制」の体制を完成する。著者は、世界体制の重層構成を「頂点」「中央」および「底辺」の三重構造として把握する。すなわち、「頂点」にはロンドン世界金融市場をもつイギリスが位置し、「中央」には新鋭大型設備の工業をもつ後発資本主義諸国が登場し、「底辺」には、従属後進諸国および植民地が配置されるという構図をえがいている。

上述のように著者の帝国主義論の特質は、「三段階、三重層構成」で資本主義の世界体制を把握する点にある。そして帝国主義は、「世界資本主義の<完成姿態>」(24ページ)であるとともに、「現代の資本主義の世界体制の構図の原型」(33ページ)として歴史的位置づけがなされている。このように歴史実体的思考を駆使して帝国主義の総体的認識をおこなった著者は、「II 帝国主義の学説」においていままでのいっさいの帝国主義論にたいする批判をおこなう。これらの多岐にわたる論点にふれることは専門家にゆだねることとして、本紹介では「III 帝国主義の研究」において著者がもっとも力点をおいているイギリス型帝国主義の問題について紹介しておこう。

通市場性の獲得」をあげる流通主義的見解が支配的であった。さらにイギリス帝国主義の生産的基底を分析した諸研究においても「一国資本主義論の色彩」が濃厚すぎて、「植民地的帝国主義」への配慮の乏しいことが指摘される。さらに帝国主義の歴史的・現状分析にあたっての揺ごとのない規準であるレーニン『帝国主義』をも間接的な言いまわしでつぎのように批判している。すなわち、「各国の独占資本の形態的な特徴よりもむしろ独占資本一般の成立を問題にしたのが『帝国主義』の特色と認められながらも、では、この生産の集積と独占との分析においてイギリスについては、ヘルマン・レヴィーからの抽象的叙述の引用があるのみで具体例が示されていないのは片手落ちではないかとも、しばしば指摘されている」(162ページ)と。

では著者は、どのようなイギリス帝国主義像をえがいているであろうか。世界体制の三段階、三重層構成においてイギリスは「頂点」に位置しているために、決定的な重要性をもつ。

著者は、イギリス帝国主義の研究においてなによりも段階転換の内的契機としての独占資本の発達を重視する。そしてイギリス独占資本発達の究明の意義を2つに大別している。第1に、独占資本は帝国主義の中心軸であるから、この蓄積運動を具体的に明確にすることが必要であり、とくに帝国主義的特質をもったイギリス独占資本の究明は、独占資本主義論展開のために不可欠である(一般的研究)。第2に、帝国主義体制のもとでは主要資本主義国は、それぞれ帝国主義的諸特質を共有しながら、歴史的諸条件の相違に応じて特殊性を帯びた配置のされかたをしているが、イギリス独占資本の個性的特質の把握は、イギリス帝国主義の基底を明確にするうえで不可欠である(個別研究)。著者は、このような一般的特質と個性的特質の両方の究明をふまえてはじめて特殊性が明らかにされるとみるのである(231—233ページ)。そしてイギリス独占資本発達の特殊性究明の前提として「この国が、植民地の先制的支配の体制をもつ先発資本主義国、商品と資本とについて海外に傾斜させている先発資本主義国であることから生じてくる規制」(234ページ)をあげ「先発資本主義国型独占資本」をイギリスの独占資本の原型とみる。その特質は、(1)特殊製品をベースとする独占資本、(2)短期金融市場をベースとする独占資本、(3)門閥的紐帯の独占資本、(4)帝国主義型超独占資本および(5)流通市場の末端まで支配の独占資本である点にあり、今日のイギリス独占資本をこれらの特質をもつ原型の「現代の変容」として把えるのである(234—245ページ)。このイギリス独占資本究明は、『独占資本イギリスへの道』における分析をさらに押進めたものであり、「アングロサクソンの問題意識」

から脱却した著者の分析には多く学ぶべきものがある。他面「段階」、「重層」、「先発資本主義型」「現代的変容」といった諸範疇は、実証的作業によって一層精密化することが不可欠であろう。この点、後学に課せられた課題といえよう。

(新評論, 1979年, 254ページ)